

V. D. ナボコフとロシア革命

池田嘉郎

ウラジーミル・ドミートリエヴィチ・ナボコフは、革命期のロシアを代表する自由主義者である。帝政期には彼の活動は、国家の権力を規制することに向けられていた。対照的に二月革命ののちには、国家の解体を押しとどめ、国家権力(государственность)の回復を図ることに彼は心血を注いだ。ナボコフの軌跡をたどることは、1917年の革命がロシア史にもたらした変動の深さを、あらためて理解することを助けてくれる。

ナボコフについては、ブライアン・ボイドによる息子ウラジーミルの伝記の中で、その経歴や息子との関係が丹念に追われている。¹ 本稿はボイドが使っていない史料も用いながら、ロシア革命研究の観点からナボコフの活動を追う。最後に付録として、アメリカ・コロンビア大学の稀観書・手稿図書館が所蔵する史料のうち、1920年にナボコフが書いた書簡3点を紹介する。そこにはわずかであるが、息子ウラジーミルに触れている箇所も見られる。したがって、本稿は息子ウラジーミルの研究にとっても、若干の興味を惹起するものではないかと考える。

1. 帝政国家の批判者

ナボコフは1869年7月にツァールスコエ・セローで生まれた。貴族の家系で、父親はアレクサンドル2世と3世の司法大臣を務めた。ナボコフはペテルブルグ大学法学部を卒業したのち刑法学者となり、1897年からはペテルブルグ法学院の刑法学科長であった。² 専制体制には極めて批判的であり、1903年にキシニョフでユダヤ人ポグロムが起こると論説「キシニョフの大量殺戮」を発表した。ナボコフはポグロムを阻止できなかった現地の行政・警察・軍を批判したばかりでなく、「抑圧と無権利の体制」

¹ ブライアン・ボイド(諫早勇一訳)『ナボコフ伝 ロシア時代 上』みすず書房, 2003年。筆者も、池田嘉郎『ロシア革命 破局の8か月』岩波書店, 2017年, の要所でナボコフの言動を紹介した。亡命後のベルリン時代については、諫早勇一『ロシア人たちのベルリン——革命と大量亡命の時代』東洋書店, 2014年, を見よ。著作集も出た。V. D. Набоков. До и после Временного правительства. СПб., 2015. 本稿でナボコフという場合, V. D. ナボコフを指す。日付は本論ではロシア暦, 付録では新暦である。

² Канищева Н. И. Набоков Владимир Дмитриевич // Государственная дума Российской империи. 1906-1917. Энциклопедия. М., 2008. С. 390.

こそがユダヤ人差別を生み出しているとして、専制体制を正面から非難した。³

1905年に「血の日曜日」事件が起こると、ナボコフはペテルブルグ市議会で事件を弾劾し、法学院から追われた。⁴ 1905年革命の渦中、彼は立憲民主党（カデット）の創設者の一人となり、同党の中央委員会メンバーや中央委副議長を歴任した。1906年には第一国家ドゥーマ（下院、ドゥーマ）の議員に選出され、諸法案の起草に加わった。⁵

ドゥーマでナボコフは、死刑廃止法案に深く関与した。ナボコフは死刑により秩序回復を進める帝政を厳しく非難した。他方で彼は、法的手順を無視して死刑廃止を即刻実現せよと主張する左派議員とも論争しなければならなかった。憲法で定められた国家評議会と皇帝権力の同意を無視して、自立的に行動せよというのか、「それならばわれわれは国家ドゥーマではなく、何か違うものである」と彼は審議で述べた。ナボコフは皇帝権力を憲法によって規制することを目指していたのであり、ドゥーマが超憲法的な革命権力となることを求めてはいなかった。1906年6月、議員たちはナボコフ報告に基づいて全員一致で法案を可決したが、3週間後に政府はドゥーマの解散を強行した。⁶

この挙に抗議して、ナボコフたちドゥーマ議員は、納税・徴兵拒否を呼びかける「ヴィボルグの檄」を発したが、法への不服従を扇動した罪に問われた。1907年12月12日から18日まで開かれた裁判で、最初に被告人の意見陳述を行なったのは、I. I. ペトルンケーヴィチ、F. F. ココシキン、ナボコフという3人のカデットであった。12月13日、ナボコフはこう述べた。「個々人の、まして一国家の生涯には、最高善によって、われわれの各人にとり最高の法（suprema lex）であるあの公共の壮健（salus publica）によって、認められるような行動をとることを命じられる瞬間がある」。⁷ 「ヴィボルグの檄」とその後の裁判闘争は、ナボコフにとっても他のカデット議員にとっても、法を越えたものために活動するという意味で、極めて革命的に振る舞った一瞬であった。彼らは法を物心崇拝していたわけではなく、国家のあるべき姿として、法に基づく国家

³ *Набоков Влад.* Кишиневская кровавая баня // *Право.* 1903. № 18. Стб. 1281-1285. とくに Стб. 1282, 1284.

⁴ ボイド『ナボコフ伝 上』59-62頁。

⁵ *Канищева.* Набоков. С. 390; Съезды и конференции конституционно-демократической партии. Т. 1. 1905-1907 гг. М., 1997. С. 681.

⁶ *Набоков В.* Законопроект об отмене смертной казни // *Право.* 1906. № 51. Стб. 4015-4028. 引用は Стб. 4022.

⁷ Дело о выборгском воззвании. Стенографический отчет о заседаниях особого присутствия С.-Петербургской судебной палаты 12-18 декабря 1907 г. СПб., 1908. С. 32-54. ナボコフの陳述は С. 47-54. 引用は С. 52.

を求めていた。その、国家のあるべき姿を測る高次の理念が、ナボコフが引き合いに出した「公共」であったともいえる。自分たち「公衆」(общественность)こそが、公共の理念を体現しているとも、ナボコフたちは考えていたであろう。⁸ 結局ナボコフは3か月の収監刑を言い渡され、首都のクレスティ監獄で服役した。選挙権も剥奪された。⁹

その後もナボコフは精力的に政治・執筆活動を続けた。1913年のベイリス事件に際しては、反ユダヤ主義的な冤罪を生まんとする法廷と政府を糾弾した。大改革で司法改革にたずさわった人たちは、「50年後にこの〔かつて振り捨てた〕不正^{クリグダ}が新しい外見のもとで甦ると想像できただろうか」と彼は書いた。¹⁰ だが、1914年に第一次世界大戦が始まり、予備軍将校として召集されると、ナボコフは政治や執筆からは距離をおいた。1915年9月には、参謀本部のアジア局に配属された。¹¹ こうしてナボコフはペテルブルグで二月革命を迎えることとなった。

2. 臨時政府の官房長

1917年3月3日、ナボコフは皇弟ミハイル大公の宣言を起草することで、革命の政治に身を投じた。この宣言は、憲法制定会議が招集されるまで、カデットが主体となった臨時政府に全権力を委ねることを表明していた。¹² 1906年にドゥーマが超憲法的な革命権力となることを望まなかったナボコフは、そうした権力の創出を自ら助けることとなった。いまや、「公共」「公衆」と、国家は一体化したのであった。そうである以上、臨時政府に全権力を集中させ、国家を守り、何とかして新しい秩序をつくりださねばならなかった。

ナボコフは、フィンランド総督に就任できるかという P. N. ミリュコフ(カデット党首、臨時政府の外務大臣)の打診に拒否で応え、臨時政府官房長(Управляющий делами Временного Правительства)に就くと申し出た。「表面的には二次的であるかの

⁸ カデットの法治国家理念については、*Кокошкин Ф. Лекции по общему государственному праву. Издание второе. М., 1912. С. 261-262.* 社会上層の教養層である「公衆」については、Yoshiro Ikeda, "The notion of Obschestvennost' during the First World War," in Yasuhiro Matsui, ed., *Obschestvennost' and Civic Agency in Late Imperial and Soviet Russia: Interface between State and Society* (Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2015), pp. 61-81.

⁹ *Канищева. Набоков. С. 390*

¹⁰ *Набоков Влад. «Мировой» процесс // Вестник Европы. 1913. Кн. 12. С. 353-360. 引用は С. 353.*

¹¹ *Набоков В. Временное Правительство // Архив русской революции. Т. 1. [Берлин,][1921.] (Reprint, 1991) С. 11.*

¹² *Набоков. Временное Правительство. С. 16-22.*

ような」この職務が、国家体制の機能が曖昧である状況下では「特別な意義をもつ」との判断であった。¹³ 3月7日、臨時政府は、旧政府の大臣会議官房長を解任し、ナボコフを大臣会議官房長とすることを決めた（この時点では「大臣会議」という語がまだ使われていた）。¹⁴

官房長ナボコフは、臨時政府の活動に統一を与えることを目指した。3月8日の閣議では彼の提案により、「臨時政府の意思は統一的でなければならず、それが担う責任は集合的なものであるから、少数派の見解も、個々人の見解も、議事録には記録されず、案件にも残されない」という原則が確立された。13日には、他省庁の管轄に関わる法案は相互に事前に調整することが、彼の提案によって確認された。¹⁵

官房長は、臨時政府と法制審議会をつなぐ役割も担った。カデット法学者が結集した法制審議会は、法案の法的整合性を事前に検討したほか、国制に関わる広範な問題を討議した、臨時政府の頭脳のような機関であった。ナボコフは3月10日にその会議に初めて顔を出している。18日には彼の盟友ココシキンが、法制審議会の議長となった。22日に臨時政府は、法制審議会の設置を公式に確認するとともに、官房長ナボコフが法制審議会メンバーの権限をもって、同審議会の構成員となることを決めた。¹⁶

臨時政府はまた、3月12日にカフカース太守代理を解任し、ナボコフを在ペトログラード・カフカース太守代理管理担当コミッサールに任命している。¹⁷ これは民主化されたカフカース現地機構に対する、帝国首都における監督役のようなポストであっただろう。

官房長を間近に見ていた B. E. ノリデ男爵によれば、「臨時政府を自称しているが、実際には別々の方を見ており、革命の荒波によって一つに結び付けられているような人々の極度に偶然的な集まりを、真の権力に変えるために、ナボコフはできる限り全てのことをしようとしていた」。ノリデ男爵によればナボコフは、カデットの大臣たちは最後まで臨時政府に留まるべきだとも考えていた（実際、臨時政府の大臣が辞任できるのかどうか、誰にも分からなかった）。¹⁸

¹³ *Набоков. Временное Правительство. С. 16-24.* 引用は C. 23-24. ボイド『ナボコフ伝 上』143頁が、「官房長官補佐」として、「補佐」を付しているのは誤訳。原文は head of chancellery. Brian Boyd, *Vladimir Nabokov. The Russian Years* (New Jersey: Princeton University Press, 1990), p. 125.

¹⁴ Журналы заседаний Временного Правительства [以下、ЖЗВПと略記]. Т. 1. Март-апрель 1917 года. М., 2001. С. 44. 3月14日にこの任命がもう一度確認された。Там же. С. 97.

¹⁵ ЖЗВП. Т. 1. С. 52, 89.

¹⁶ ЖЗВП. Т. 1. С. 160; Записи хода заседаний Юридического совещания при Временном правительстве. Т. 1. Март-июнь 1917 года. М., 2018. С. 42, 63.

¹⁷ ЖЗВП. Т. 1. С. 82.

¹⁸ *Нольде Б. Э. В. Д. Набоков в 1917 г. // Нольде Б. Э. Далекое и близкое. Исторические очерки.*

戦争遂行は臨時政府、またカデットの、主要な目的であった。ナボコフは3月ないし4月の時点で、厭戦気分が二月革命の基本原因の一つだと考えていた。だが、戦争終結に向けてこの時点で彼が行動を起こしたわけではない。「ロシアにとって甚大な損害——道徳的・物質的な——なしで、それ〔戦争〕を終わらせる方法は、一人の賢人たりとて、当時も、後にも、見出さなかつただろう」と彼は振り返っている。¹⁹

4月末、帝国主義的なミリュコフの外交路線に抗議運動が起こり、最初の臨時政府が崩壊する「四月危機」が起こった。このときナボコフは、カデットの大臣は臨時政府に留まるべきだという立場を堅持して、混乱の收拾に寄与した。5月4日から5日にかけての夜、組閣交渉の過程で、新設の食糧大臣のポストをめぐる議論が紛糾した。²⁰ 妥協がならず、全大臣の辞任が問題となった。辞任の方法について、大臣たちの見解は3つに分かれた。二月革命に際して臨時政府を成立させたドゥーマ臨時委員会に対して、臨時政府は集合的に辞表を出し、同臨時委議長である M. V. ロジャンコに組閣を委ねるべきであるという意見、個々の大臣が首相 G. E. リヴォフ公に職を返上し、リヴォフ公が新内閣の構成を決めるべきであるという意見、臨時政府は全権力を担っている以上、集合的に辞任するとともに、新内閣の編成は自己の権限において誰か特定の人物に一任し、組閣がなされるまで元大臣は各省庁の業務を管理し続けるべきであるという意見である。見解の相違に鑑みて、深夜の1時にココシキン、N. I. ラザレフスキー、ナボコフの3人だけで法制審議会が開かれた。彼らは以下の結論に達した。臨時政府が全体として全権を返上するならば、新政府をつくる義務はドゥーマ臨時委員会に属するが、構成の個別的な変更であれば臨時政府は自己の権力によってそれを行なえる、ただしドゥーマ臨時委員会も自分の見解を述べるができる。これは、臨時政府が全権力をもつことを確認した点で意味があったといえる。ナボコフは紛糾の元になった食糧大臣のポストをめぐるでも、解決に貢献した。シンガリョフが財務大臣となり、かつ5月いっぱい食糧省も指導するという妥協案をナボコフ

Париж, 1930. С. 145-146.

¹⁹ *Набоков. Временное Правительство. С. 41.*

²⁰ ペトログラード・ソヴィエト執行委員会は、V. M. チェルノフ（エスエル）を農業大臣、A. V. ペシェホーフ（人民社会主義者）を食糧大臣に推した。それまで食糧問題を担当してきた農業大臣 A. I. シンガリョフ（カデット）には、財務大臣のポストが提案された。シンガリョフは農業大臣のポストを譲ることは同意したが、改善の兆しが見えてきた食糧問題をいま手放せば混乱が生じるという理由で、自分が食糧大臣になることを求めた。ソヴィエト執行委は折れず、シンガリョフが辞任を口にする、文部大臣 A. A. マヌイロフ（カデット）も同調し、残り的大臣たちも自分の辞任をやむなしと考えるにいたった。Новое министерство // Русские ведомости. 06. 05. 1917.

が出し、受け入れられたのである。²¹

ナボコフの努力もあり、カデット大臣で辞任したのは、四月危機の原因となったミリュコフだけであった。だが、ナボコフ自身は、このとき臨時政府官房長を辞任している。カデット党機関紙『レーチ』が伝えた彼の見解によれば、臨時政府の事務を組織化するという課題は既に果たされた、ましてこのポストが「部分的に持ち得た政治的意義は、今、臨時政府の構成が変わったもとでは全く、彼の見解では、失われている」。このため彼は、一か月前に提案されていた、セナート（元老院、最上級裁判所である）破毀部の仕事につくことにしたという。²² 臨時政府は5月5日付けで彼をセナート議員に任命した。²³

カデット党中央委員会は、新設の国家後見（社会保障）省の大臣の候補としてナボコフを満場一致で選んだ。臨時政府内でも彼が候補となることは支持された。だが、「例外的な組織的能力と実務経験」を必要とするこのポストを引き受けることはできないとして、ナボコフは国家後見大臣への就任を固辞した。²⁴

3. 崩壊の中で

官房長を辞めたあとも、新国家を支えるというナボコフの考えは変わらなかった。臨時政府も彼に重要な役職を委ね続けた。5月15日にナボコフは法制審議会のメンバーに任命された。21日からは憲法定会議選挙規約案策定準備特別審議会のメンバーとなって、活発に発言した。²⁵ たとえば6月9日の会議では、社会主義者がペトログラード市とモスクワ市をペトログラード県およびモスクワ県の一部として扱うように主張したのに対して、ナボコフは両市をそれぞれ独自の選挙区とすることを支持した。「それらは個別の県の、ではなく、国家全体の鼓動が脈打っている中心なのである」と彼は述べた。²⁶ 6月27日には、ナボコフは在ペトログラード・カフカース問題コミッ

²¹ Новое министерство // Русские ведомости. 06. 05. 1917.

²² Обновленный состав Временного правительства // Речь. 06. 05. 1917. 別の記事によれば、臨時政府が発足した頃、司法大臣 А. Ф. Келенский がナボコフにこのポストを提案していた。そのときは官房長との兼任は不可能という理由で、彼は断った。だが、今回の政府危機の過程で（明らかにナボコフが官房長の辞意を表明したのち）ケレンスキーは再度この提案を行ない、ナボコフが受け入れたのである。Новое министерство // Русские ведомости. 06. 05. 1917.

²³ Мурзанов. Н. А. Словарь русских сенаторов. 1711-1917 гг. Материалы для биографий. СПб, 2011. С. 297.

²⁴ Обновленный состав Временного правительства // Речь. 06. 05. 1917.

²⁵ ЖЗВП. Т. 2. Май-июнь 1917 года. М., 2002. С. 74, 91.

²⁶ Стенографический отчет Особого Совещания для изготовления проекта положения о выборах в Учредительное Собрание. Заседание девятое. Пятница, 9 Июня 1917 г. Пг., [1917.] Стб. 578. ナボ

サールとなり、カフカースの監督役を続けることとなった。彼は刑法典改正委員会の委員でもあった。²⁷

7月初頭、ウクライナ問題への対処をめぐるカデット大臣たちが辞表を出し、第一次連立政府は解体した。²⁸ 同時期に首都では兵士の反乱未遂も起こった。この「七月危機」をへて首相となったケレンスキーは、カデットとの組閣交渉において、ナボコフにも入閣を求めた。7月18日、入閣要請に対してN. I. アストロフ、N. M. キシキン、ナボコフは連名で書簡を公表し、各大臣は自分の良心のみに責任を負うことをはじめ、全権をもつ臨時政府に対するソヴィエトの圧力を斥けるよう、条件を列挙した。結局、3人は第二次連立政権に入らなかった（カデットからの入閣自体は実現した）。²⁹

ナボコフは、法制審議会に出席し続けた。³⁰ 8月1日にはナボコフを含む憲法制定会議選挙規約案策定準備特別審議会のメンバーは、憲法制定会議選挙全ロシア委員会のメンバーに横滑りした。ナボコフはこの委員会の副議長を務めた。³¹

その一方でナボコフは、ソヴィエトや労働運動に強硬な措置を取るよう求める最高総司令官L. G. コルニーロフに期待をかけるようになっていった。コルニーロフのいる大本営がケレンスキーに対してクーデタを準備しているという、元宗務院総監V. N. リヴォフの曖昧な知らせを聞いたナボコフは、ココシキン（会計監査院長）他3人のカデット大臣にはその内容を伝えた。ナボコフがリヴォフの訪問について伝えた相手はごく限られていたようである（ミリュコフにも伝えていただろう）。³² カデットのV. A. マクラコフは、「挙兵自体の前日」に、「V. N. リヴォフの来訪と関連して、カデット内部で生じた会話について」初めてナボコフから聞いたと振り返っている。³³

コフ側の見解が可決された。 Там же. Стб. 601.

²⁷ ЖЗВП. Т. 2. С. 368; Набоков. Временное Правительство. С. 77.

²⁸ ボイドは「ナボコフら CD 党員は、みな臨時政府を辞した」と記すが、ナボコフはこの時点ではすでに官房長ではなく、かつ後述するように法制審議会は辞めていないので、不正確である。ボイド『ナボコフ伝 上』149頁。

²⁹ Последние известия // Речь. 18. 07. 1917. 細かいことだが、署名の順番は公表された版では本文の通りだが、タイプ打ち原本ではナボコフ、キシキン、アストロフの順。 ГАРФ (Государственный архив Российской Федерации), ф. 1807, оп. 1, д. 495, л. 1-10б.

³⁰ 法制審議会には、少なくとも9月28日まで出席している。 ГАРФ, ф. 1792, оп. 1, д. 4, л. 201. 10月後半は議事録に出席者が記されていない。 ГАРФ, ф. 1792, оп. 1, д. 5.

³¹ ЖЗВП. Т. 3. Июль-август 1917 года. М., 2004. С. 221; Набоков Владимир Дмитриевич // Всероссийское учредительное собрание. Энциклопедия. М., 2014. С. 262.

³² Набоков. Временное Правительство. С. 43-45.

³³ Maklakov V. A. to Miliukov P. N. 24 January 1923. Columbia University Libraries. Rare Book and Manuscript Library. Pavel Nikolaevich Miliukov Papers, 1879-1970. Box 1.

コルニーロフ周辺でつくられていた新閣僚リストにはナボコフの名が挙がっていたが、本人は関知していなかったと考えられる。³⁴ 全体としてナボコフたちカデットは、コルニーロフの「反乱」前後、彼に共感しつつも、ケレンスキーとの仲裁にも力を割いた。³⁵

ソヴィエトの支援を得たケレンスキーによるコルニーロフの鎮圧は、ナボコフたちにとって国家秩序のさらなる解体を意味した。革命前のナボコフには、国家を相対化する基準として「公共」「公衆」があった。二月革命によってその基準は国家と一体化した。ここにナボコフとカデットの悲劇があった。彼らにはもはや国家を相対化する高次の基準はなかった。むき出しの国家権力自体を、何としてでも防衛しなければならなかった。

死刑の問題は、ナボコフの苦境を集約的に示した。ナボコフが求めてきた死刑の廃止は二月革命で実現した。³⁶ その後コルニーロフが、軍人の死刑を復活させた。³⁷ 9月4日、ペトログラード市議会で市長 G.I. シレイデル（エスエル）は、死刑の完全廃止を臨時政府に訴えることを提案した。左翼議員はみな賛同したが、ナボコフを含むカデット議員は反対した。³⁸ 登壇したナボコフはまず、死刑廃止を訴えてきた自分の足取りを振り返った。「諸社会主義政党の席に座っている人々の間で、死刑に反対する戦いに彼自身ほど多くの力を実際に費やしたものが、果して多く見つかるだろうか。『プラーヴォ』紙で一連の論説を発表し、第一ドゥーマでも死刑廃止を求めた。これら全てのことは、「この場合、『ブルジュイ』[ブルジョア野郎]の反革命的な表明としてではなく、一定の、深い、痛切ですらある確信として、私の言葉に接してくれるよう期待する権利を私に与える」。

ナボコフがいう痛切な確信とは、現況にあつての死刑の必要性にほかならなかった。「道德の、そして国家道德でさえもの最も強力な要請が、国家の自己保存の考慮を前にして、後景に退かねばならない、そうした状況があると私は考える」。正当防衛としての殺人が許されるように、「国家の生涯には例外的な状況がある。働きかけのための

³⁴ Дело генерала Л. Г. Корнилова. Материалы Чрезвычайной комиссии по расследованию дела о бывшем Верховном главнокомандующем генерале Л. Г. Корнилове и его соучастниках. Август 1917 г. – июнь 1918 г. Т. 2. М., 2004. С. 353, 431, 546.

³⁵ Милуков П. Н. История второй русской революции. М., 2001. С. 381-406.

³⁶ ナボコフは1906年を振り返りながら、臨時政府による死刑廃止について、「丸々11年が過ぎ、そして今、革命の強力な一振りによって高みに運び上げられた新権力は、あのととき始められた事業を完成させている」と記した。Набоков Влад. Отмена смертной казни // Речь. 18. 03. 1917.

³⁷ Милуков. История второй русской революции. С. 247-251.

³⁸ ナボコフは8月の市議会選挙で当選した。Выборы в городскую думу // Речь. 24. 08. 1917.

他のいかなる手段もなく、一時的に、可能な限り最小限に、裁判と司法の可能な限り最大限の保障を遵守した上で、死刑に頼る必要性が生じるような状況が」。自分は死刑の廃止と復活のいずれに賛成ともいわないが、市長提案には反対するとナボコフは述べた。もとより社会主義者が多数を占める市議会は市長提案を可決した。³⁹

コルネーロフの挙兵を機に、第二次連立政府は崩壊した。権力の混乱の中で、ナボコフは9月21日付けの『人民自由党報知』19号に論説「革命の6か月」を発表した（人民自由党はカデットの別称）。「現在権力は惰性の力によってもちこたえており、何らかの無意識的な自己保存本能のおかげでなお保たれている」。だが、展望は暗くなる一方である。『大ロシア革命』の第二の半年目に入り、われわれは国の全てとともに、ただぞっとする、重苦しい不安を覚えるのみである。⁴⁰

ナボコフは必死で出口を探っていた。ミリュコーフやM.M. ヴィナヴェルが一時首都を離れていたこともあり、彼はカデットの顔として奔走した。ケレンスキーとの交渉においてカデットを代表し、第三次連立政府の形成に寄与した。⁴¹ 他方、彼は臨時政府の外交路線にも影響を与えようとした。表向きは彼は、講和を口にするにはなかった。9月18日、党のクラブで彼は、「われわれの主要な課題は、攻勢を行なうというのではないにせよ、いずれにせよ、せめて春までもちこたえ、連合国に対する自らの義務を誠実に耐え忍ぶことである」と述べた。⁴² だが、舞台裏ではナボコフは、臨時政府を全面講和路線に向けて動かそうと努力した（ドイツとの単独講和はあり得なかった）。外相M.I. テレシチェンコ（無党派）に自分の考えを伝え、9月下旬にはノリデ男爵とM.S. アジェーモフとともにカデット党中央委員会で講和路線を訴えたが、同志たちの支持は得られなかった。G.N. トルベツコイ公邸でも、主だったカデットおよび右派の政治家が会議を開き、全面講和路線の是非を議論した。A.I. コノヴァーロフ（副首相兼商工大臣、カデット）、ノリデ男爵、ナボコフが全面講和を支持したが、連合国がそうした意向を受け入れないだろうという見解が支配的であった。10月半ばには陸軍大臣A.I. ヴェルホフスキー（無党派）が戦争終結に向けてカデット指導部と密かに会談をもったが、彼は振舞いに不安定なところがあり、ナボコフはその提案を支持することができなかった。戦争継続の立場のミリュコーフとシンガリョフに強く

³⁹ Городская дума о смертной казне // Речь. 05. 09. 1917.

⁴⁰ *Набоков Влад.* Шесть месяцев революции // Вестник Партии народной свободы. 1917. № 19. С. 1-3. 引用は С. 3.

⁴¹ Совещание о реконструкции власти // Речь. 23. 09. 1917. *Набоков.* Временное Правительство. С. 81.

⁴² Митинги и собрания // Вестник Партии народной свободы. 1917. № 20. С. 24.

反対することもナボコフはしなかった。⁴³

10月7日に開会された疑似議会たる「予備議会」での党の戦術をめぐることは、カデットの純粋性を維持することを主張するミリュコフに対抗して、ナボコフはアジェーモフとともに、社会主義者（まずはエスエル・メンシェヴィキ）とのブロックを組んで多数派を形成し、臨時政府を支えるよう主張した。ペトログラードで開かれた党中央委員会では後者の立場が優位であったが、モスクワで開催された第10回党大会（10月14日 - 16日）では逆になった。⁴⁴ 実際、予備議会では社会主義者とカデットの溝は埋まらず、どの党派・ブロックも堅固な多数派を形成できなかった。⁴⁵ ナボコフは予備議会の副議長であったが、エスエルやメンシェヴィキにポリシェヴィキ打倒の明確な意志がなかったと振り返っている。なお、ナボコフは予備議会の長老会議（各党派の実力者会議）について、「あえてシネドリオン [ユダヤの長老会議] と呼ぶことができた」「その構成の圧倒的多数はユダヤ人であった。ロシア人は [N. D.] アヴクセンチェフ、私、ペシエホーノフ、[N. V.] チャイコフスキーの4人だけであった」と、反ユダヤ的な調子の記述を残している。⁴⁶

理由は不明だが、10月中旬までにナボコフは、在ペトログラード・カフカース問題コミッサールの辞意をケレンスキーに伝えている。⁴⁷ 他方、憲法制定会議の準備には力を傾け続けた。10月19日開催予定の法制審議会に関する史料からは、「憲法制定会議の安全の保障、その建物内での秩序の保全に関する規約」第14項について、ナボコフが修正案を出したことが分かる。その内容は、「憲法制定会議あるいは同会議の個々の成員の自由な活動を」妨害したり抑止したりする目的で暴力や威嚇を行なったものは、無期ないし有期の流刑で処罰するというものである。ナボコフは原案にない「個々の成員」という言葉を加えている。⁴⁸ 憲法制定会議でカデットが少数派になることは

⁴³ *Набоков. Временное Правительство. С. 47-48, 81-83.*

⁴⁴ *Московские съезды // Русские ведомости. 17. 10. 1917.*

⁴⁵ *Разброд в предпарламенте // Русские ведомости. 20. 10. 1917.*

⁴⁶ *Набоков. Временное Правительство. С. 80.* ナボコフは態度をはっきりさせないメンシェヴィキの F. I. ダンの返答も「タルムード的議論」と呼んでいる（*Там же.*）。メンシェヴィキの И. М. ステクロフがユダヤ人であり、偽名であることも、否定的な調子で記している（*Там же. С. 65.*）。

⁴⁷ これに先立って、セナート議員職は兼任ができないが、ナボコフのコミッサール職は臨時なので問題ないとセナートは判断していた。Первый департамент Сената // *Русские ведомости. 04. 10. 1917.* 辞任表明は、В. Д. Набоков // *Русские ведомости. 18. 10. 1917.* ナボコフはこのコミッサールとして、9月11日から10月2日まで4回閣議に出席した。官房長辞任以降、ナボコフが閣議に出たのはこれが全てである。ЖЗВП. Т. 4. Сентябрь-октябрь 1917 года. М., 2004. С. 72, 145, 225, 237.

⁴⁸ ГАРФ, ф. 1792, оп. 1, д. 5, л. 136, 149, 154. ナボコフがこの会議に出席したかは判断できない。

確実であったから、ナボコフにはそれだけ個々の議員の自由と安全を保障すべく努力する理由があった。

10月25日から26日にかけての深夜に臨時政府の大臣たちはボリシェヴィキに逮捕された。十月革命ののち、ナボコフは憲法制定会議選挙全ロシア委員会〔全ロシア委員会〕の仕事の続け、憲法制定会議の議員にも選出された。全ロシア委員会では議長N.I. アヴィロフがしばしば出張したので、副議長ナボコフの役割が大きかった。会議の内容を教えよというソヴィエト政府の官房長 V. D. ボンチ＝ブルエーヴィチの要請もナボコフがさばいた(ベイリス事件の際に2人は会ったことがあった)。11月23日、V.I. レーニン署名の命令によって、ナボコフは同僚たちとともに突然逮捕され、ソヴィエト政府のあるスモリーヌイ学院に5日間拘禁されたのち、27日に釈放された。翌28日には憲法制定会議の開会が予定されていた(実際には延期)。28日、ナボコフはシンガリョフやココシキンが逮捕されたことを知った。彼自身はタヴリーダ宮で全ロシア委員会の仕事にあたった。ボリシェヴィキのM.S. ウリツキーがやってきて解散を求めたが、ナボコフは断った。翌日、カデット指導者の逮捕令が出たことを知ったナボコフは、そのまま帰宅せず、クリミアを目指してペトログラードを去った。⁴⁹ クリミアでの活動を経て、ナボコフは1919年4月にイギリスに去り、翌年にはドイツに移った。1922年3月、ミリュコーフを襲撃した君主主義者の銃弾を受けて、ナボコフは帰らぬ人となった。⁵⁰

付録 ナボコフが1920年に書いた3通の手紙の原文および訳を以下に掲げる。下線は全て原文にある。全て、特徴的などがった筆記体で記された、手書き史料である。

【史料1】1920年4月30日付け、ロンドンのナボコフからカップ＝ダイユ(フランス)のペトルンケーヴィチ宛ての手紙(抜粋)。⁵¹

[...] П. Н. писалъ Вамъ о моемъ намѣреніи перебраться въ Берлинъ для того, чтобы начать

⁴⁹ *Набоков*. Временное Правительство. С. 93-96. ナボコフはウリツキーのことも「厚かましいユダヤ人の顔つき」と記し、反ユダヤ主義的な気分を露わにしている。Там же. С. 95. Набоков Владимир Дмитриевич // Всероссийское учредительное собрание. Энциклопедия. С. 262.

⁵⁰ ボイド『ナボコフ伝 上』178-179, 199-201, 215, 232-234頁。

⁵¹ Nabokov V. D. to Petrunkevich I. I. 30 April 1920. Columbia University Libraries. Rare Book and Manuscript Library. Sofia Vladimirovna Panina Papers, 1900-1956. Box 4. ペトルンケーヴィチがロシア暦(4月22日)と新暦(5月5日)の両方で受領日を書いており、ナボコフが新暦で書いていることが分かる。

тамъ „настоящую“ русскую газету. Не могу сказать, чтобы я съ легкимъ сердцемъ брался за эту задачу. Вижу все ея трудности и явные и тайные подводные камни. Еслибы у меня была возможности выбора, я бы предпочелъ остаться въ Лондонѣ, продолжая работу въ New Russia (я тамъ писалъ до N 11 включительно, отдѣлъ „Russia through British Eyes“ и передалъ этотъ отдѣлъ брату при отъѣздѣ въ Парижъ). Но, къ сожалѣнію, такого выбора у меня нѣтъ, т. к. жизнь въ Англіи, благодаря условіямъ денежнаго курса, доступна только людямъ съ большими средствами или съ постояннымъ достаточнымъ заработкомъ. Найти здѣсь заработокъ, на который могла бы существовать моя многочисленная семья, – для меня невозможно. Въ Берлинѣ онъ у меня будетъ. Старшихъ два сына останутся, конечно, въ Кембриджѣ и будутъ пріѣзжать къ намъ на каникулы. [...]

P.N. [ミリュコーフ]があなたに、私がベルリンに転居するつもりであつて、それはそこで「本物の」ロシア新聞を始めるためであると言ひたいでしょう。自分が心も軽くこの課題に着手したとはいへません。そのあらゆる困難も、明らかな、また隠れた岩礁も目にしています。選択の可能性が私にあつたなら、ロンドンに残つて『ニュー・ロシア』で仕事を続ける方を選んだでしょう（私はそこで11回まで Russia through British Eyes の欄を執筆して、パリに赴いた際に弟にその欄を引き渡しました）。ですが、残念なことに、そうした選択は私にはないのであつて、というのはイギリスでの生活は、通貨レートの条件のおかげで、大きな資産、あるいは恒常的な十分な稼ぎのある人々にしか手が出ないのです。私の大所帯の家族がやطيعけるような稼ぎをここで見つけることは、——私には不可能なのです。ベルリンならば私はそれを得るでしょう。年長の二人の息子は、もちろん、ケンブリッジに残つて、休暇の間、私たちのところに来ることになるでしょう [...]

【解題】ベルリンへの転居について、ボイドは本史料に依拠しつつ、「家族にとって、そこに移るしか道はないと、V・D・ナボコフは判断していた」と簡潔に書いている。⁵²

【史料 2】1920年6月29日付け、ロンドンのナボコフからカップ＝ダイユのペトル

⁵² ボイド『ナボコフ伝 ロシア時代 上』215頁。

ンケーヴィチ宛ての手紙（抜粋）。⁵³

[...] Нужно, чтобы опять получило смысл и значение слово „европеец“, как носитель общаго культурнаго идеала. Теперь, вѣдь, „европеец“ исчезъ: есть народы – побѣдители диктующіе (или желающіе диктовать) свою волю другимъ, есть „нейтральные“, которыхъ болѣе или менѣе презираетъ каждая сторона, не получившая отъ нихъ полной поддержки, есть, наконецъ, паріи, побѣжденные, и среди нихъ на первомъ мѣстѣ нѣмцы и – увы, мы, русскіе. Версальскій миръ весь построенъ на этой схемѣ. Но она – продуктъ войны, она сама по себѣ нѣчто уродливое и противоестественное, и было бы безумно полагать, что на ней можетъ основаться нѣчто прочное и здоровое. Нужно преодолѣть этотъ кошмаръ, – и всѣ усилія нашего поколѣнія и, вѣроятно, ближайшаго послѣ насъ долженъ быть направленъ на то, чтобы достигнуть этого преодолѣнія и добиться психологіи нормальной, здоровой, имѣющей свои корни въ великомъ началѣ социальной и международной солидарности. Въ этомъ и разрѣшеніе русской проблемы, поскольку рѣчь идетъ о большевизмѣ, который также всѣмъ нутромъ своимъ связанъ съ психологіей классовой ненависти и съ отвратительными навыками военнаго времени. Къ этому и нужно звать, – это единственный по существу вѣрный путь. И еслибы я былъ убѣжденъ такъ, какъ Вы, повидимому, убѣждены, что вся Германія насъ презираетъ и ненавидитъ и лишь стремится къ тому, чтобы использовать насъ для будущей борьбы, для „реванша“, то никакія соображенія не побудили бы меня поселиться тамъ и издавать въ Берлинѣ газету. Но именно здѣсь у насъ разныя оцѣнки. [...] я также не сомнѣваюсь въ томъ, что [...] подавляющая масса въ Германіи хочетъ только одного: возможности возстановить свое благосостояніе, вернуть шансы процвѣтанія страны, вернуть ей надлежащее мѣсто среди другихъ государствъ. И я также признаю, что Германскій народъ тяжелой цѣной расплачивается за преступныя и легкомысленныя затѣи своихъ прежнихъ вождей, но что только формально и условно его можно сдѣлать отвѣтственнымъ за нихъ. Вотъ эти[-]то мои убѣжденія и даютъ мнѣ возможность жить и работать въ Германіи. И вмѣстѣ съ тѣмъ, я хочу вѣрить, что въ нихъ нѣтъ ничего несомнѣнимаго съ интересами Россіи, съ достоинствомъ и патриотизмомъ русскаго. [...]

⁵³ Nabokov V. D. to Petrunkevich I. I. 29 June 1920. Columbia University Libraries. Rare Book and Manuscript Library. Sofia Vladimirovna Panina Papers, 1900-1956. Box 4.

[...] 共通の文化的理念の担い手としての「ヨーロッパ人」という言葉が、意味と意義を再び得ることが必要です。というのは、今では「ヨーロッパ人」は消え去ってしまったからです。自分の意思を他のものたちに押しつける（あるいは押しつけることを望んでいる）戦勝国はありますし、「中立国」もあります、それらの国々から完全な支援を受け取ることがなかった各々の側は、多かれ少なかれそれらを軽蔑しています、そして最後に、敗北した最下層のものたちがあって、その中で第一を占めるのはドイツ人と——嗚呼、われわれロシア人です。ヴェルサイユ講和は全体がこの図式に基づいて築かれました。ですが、それ〔図式〕は——戦争の産物であり、それ自体として何か間違った、自然に反するものであり、何か堅固で健全なものがそれに基づき得ると考えるのは愚かなことでしょう。この悪夢を克服する必要があります、——そして私たちの世代と、恐らくは私たちのすぐ下の世代の全ての努力は、そうした克服を成し遂げること、社会的また国際的連帯という偉大な原理に根をもつ正常で健全な心理を獲得することに向けられなければなりません。このことにロシア問題の解決もあるのです。なぜなら問題となっているのはボリシェヴィズムであり、それはやはりその全本性によって階級的憎悪の心理や、戦時の嫌悪すべき習性と結びついているからです。このことへと呼びかけねばなりません、——これは本質において唯一正しい道なのです。そしてもし私が、あなたが恐らく確信しているように、全ドイツがわれわれを軽蔑し、憎悪しており、未来の戦い、「報復」のためにわれわれを利用することを目指しているに過ぎないと確信していたならば、そこに居を構えてベルリンで新聞を発行するなどということには、いかなる考慮も私を向かわせはしなかったでしょう。ですが、まさにここで私たちの評価は異なっているのです [...] 私は [...] ドイツで圧倒的多数の大衆は一つのことだけを欲していることも疑っていません。それは自らの豊かさを再興し、国の繁栄のチャンスを取り戻し、他の諸国に交じてそれに然るべき場所を取り戻すことの可能性です。そしてまた、ドイツ人民が重い代償によって自分たちのかつての領袖たちの犯罪的で軽率な企みの報いを受けていること、しかし彼らのためにそれ〔ドイツ人民〕に責任を負わせることができるのは、ただ形式的かつ仮想的であるに過ぎないことを、私はやはり認めるのです。まさにこの私の確信こそが、ドイツに住み働く可能性を私に与えるのです。そして、それとともに、私はそこ〔確信〕に、ロシアの利益、ロシア人としての尊厳また愛国心と両立不可能なことは何もないと信じたいのです。 [...]

【解題】革命をへたロシア人による、第一次世界大戦後のヨーロッパや、ヴェルサイユ講和についての認識が記された、興味深い史料である。ナボコフがベルリンを居住地とした背景も窺える。

【史料 3】1920 年 11 月 3 日付け、ベルリンのナボコフからミリュコフ宛ての手紙、手書き（全文）。⁵⁴

Berlin. Grunewald
Egerstrasse, 1

3 Ноября 1920

Дорогой
Павель Николаевич,

Я нахожусь под впечатлѣніемъ только что прочитанной статьи Wells'a въ „Sunday Express“ 31 Окт., присланной мнѣ моимъ сыномъ. Кажется, это первый случай изображенія Совѣтской Россіи писателемъ, обладающимъ такимъ огромнымъ талантомъ, и картина получается потрясающая. Тѣмъ ужаснѣе и отвратительнѣе основная точка зрѣнія Wells'a, его отправной пунктъ, предопредѣляющій его выводы. Мнѣ кажется, надо напречь всѣ усилія, чтобы бороться съ этимъ пониманіемъ Россіи и ея теперешняго положенія, - оправдывающимъ Большевицское Правительство и рисующимъ такую картину, будто „кто-то“ (и даже чуть ли не „капитализмъ“) разрушилъ Россію, а Совѣтская власть пришла и на развалинахъ (въ качествѣ „an emergency Government“) устроила какой-то, хоть элементарный, порядокъ, что[-]то сдѣлала, распредѣлила и проч. и оказалась „единственно возможнымъ“ Правительствомъ. Вамъ слѣдало бы въ „Times“ или въ „Daily Telegraph“ выступить съ открытымъ письмомъ по поводу такой нелѣпой, невежественной, недобросовѣстной, просто подлой трактовки вопроса. Нужды нетъ, что будетъ еще рядъ статей: онѣ могутъ быть разсматриваемы совершенно отдѣльно, и вліяніе каждой изъ нихъ слѣдало бы парализовать, поскольку это возможно. Недостаточно писать объ этомъ въ „New Russia“

Интересно бы знать, сколько социалистъ и pro-bolshevist Wells собралъ за эти статьи въ „Sunday Express“ гиней, мирно почивающихъ и плодящихся на его счету въ какомъ[-]нибудь лондонскомъ банкѣ. Въ результатѣ своей поѣздки, хозяинъ очаровательнаго уголка въ Essex'ѣ можетъ быть ввести въ немъ – на заработанный гонораръ – какіе[-]нибудь новыя улучшения и удобства, завести себѣ новый моторъ или что-ниб. подобное. Русскія страданія, ихъ

⁵⁴ Nabokov V. D. to Miliukov P. N. 3 November 1920. Columbia University Libraries. Rare Book and Manuscript Library. Pavel Nikolaevich Miliukov Papers, 1879-1970. Box 2.

池田嘉郎

„эксплоатация“ – на что[-]ниб. пригодятся этому архи-суперь-экстра „буржую“ въ жизни, привычкахъ, вкусахъ, нравахъ – и большевику на бумагѣ. . .

Ждемъ Вашихъ статей. Уже очень пора!

Вашъ Влад. Набоковъ

ベルリン. グルーネヴァルト
エーガー通り 1

1920年11月3日

親愛なる

パーヴェル・ニコラエヴィチ,

私はついさっき読み終えたばかりの、『サンデー・エクスプレス』10月31日号のウェルズの論文の印象が頭から離れません。これは私の息子が私に送ってくれたのです。恐らく、これは、これほど巨大な才能をもった作家がソヴィエト・ロシアを叙述した、最初の事例でしょう。そして、情景は身震いするようなものになっています。それだけにいっそう、ウェルズの基本的な観点、彼の結論を前もって定めている彼の出発点は、おぞましく、いやらしいものです。私の考えでは、ロシアとその今日の状況についてのこうした理解——ボリシェヴィキ政府を正当化し、あたかも「誰か」（それどころかほとんど「資本主義」とさえいいかねない）がロシアを破壊したかのような、それでソヴィエト権力がやってきて、瓦礫の上で（「非常事態政府」として）何らかの、初歩的ではあるかもしれないが、秩序を築きあげ、何かを実行し、分配し、等々、そして「唯一可能な」政府となったというかのような——と戦うために、全力を傾けねばなりません。こんなばかげた、無学で、良心がなく、ただ単純に卑劣であるような問題の解釈について、あなたが『タイムズ』か『デイリー・テレグラフ』に公開書簡を発表するべきではないでしょうか。これからも一連の論文が続くだろうということは、どうでもいいことです。それらは全く個別に検討することができますし、その一つ一つの影響を、できるかぎり無害化していくべきでしょう。こうしたことについて『ニュー・ロシア』に書くだけでは不十分でしょう……

社会主義者で親ボリシェヴィキのウェルズが、『サンデー・エクスプレス』のこれらの論文で何ギニー手にしたか分かれば面白いでしょう。それはどこかのロンドンの銀行の彼の口座で安らかに横たわって増殖しているというわけです。自分の旅行の結果として、エセックスの魅惑的な一隅の主人は恐らくそこに——稼いだ原稿料で——何らかの新しい改良や設備を導入したり、新しい車か何かそうしたものを手に入れたりするのでしょう。ロシ

ア人の苦悩，彼らの「搾取」は——何かの役に立つのでしょうか，生活，習慣，好み，気質の点における，この超＝スーパー＝エクストラ「ブルジュイ」，紙の上でのポリシェヴィキには...

あなたの論文をお待ちしています。もう書いてもじゅうぶんにいい頃でしょう！

あなたのウラジーミル・ナボコフ

【**解題**】 ウェルズの論文は，後に『影のなかのロシア』にまとめられるものである。ボイドは，ナボコフと息子ウラジーミルがともにウェルズの見解に批判的であったことは書いているが，本史料は，ウェルズの論文をナボコフに送ったのは息子ウラジーミルであったことが分かる点で貴重である。⁵⁵

⁵⁵ ボイド『ナボコフ伝 上』218-219頁。ナボコフとウェルズの親交について，池田嘉郎「第一次世界大戦とロシア・リベラルのヨーロッパ認識——カデットを中心にして」『ロシア史研究』97号，2016年，35-36頁，参照。